

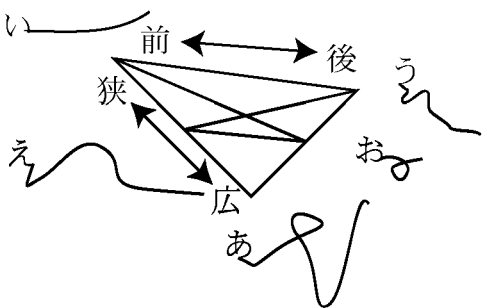
母韻

藤井貞和の詩「母韻」(詩集『静かの海』石、その韻ひびき)による。
 畠中恵子のために作曲。二〇〇一年三月

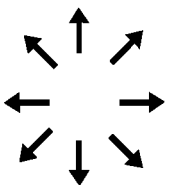
高橋悠治

記号と演奏法

母韻表



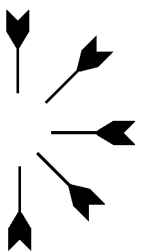
口のかたちを
 しだいに変える



→	あ	い	う	え	お
あ	↘	↖	↗	↖	↗
い	↘	↘	→	↓	↘
う	↘	←	↖	↘	↓
え	↘	↑	↗	↘	→
お	↘	↖	↑	←	↘

母韻 ↓ 母韻

話声音 (高さ5段階)



つなげる

切る

前出音型を参照
 (変奏も可)



記号のついていないことはは
 歌と語りのあいだを自由に往復しつつ

「ロトバ」

座る位置 5箇所 A E I O U

演奏法

記号に沿って練習し
 かたが身についたら
 それらにとらわれず 自由になってゆく

母韻

「立つ」

「ああいう絵、ああいう青い絵！」

「位置A 座る」

ああいう絵、
ああいう絵、
ああいう絵、
青い絵！

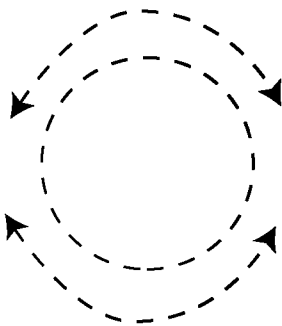
その母は、思い立つ、
「そうだ青い絵を」
「駅に貼りだすこと」

駅、
「そは、人らの通い激」
「下、」

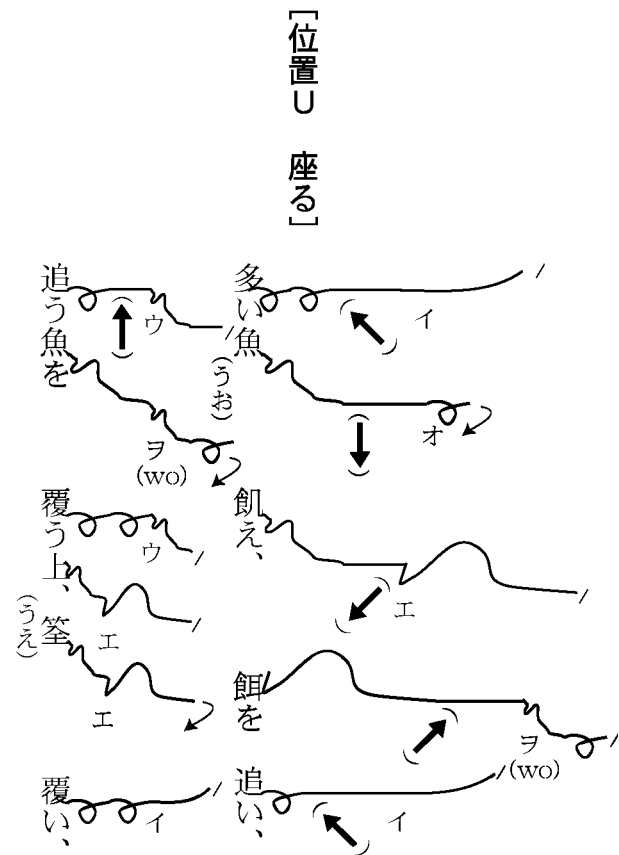
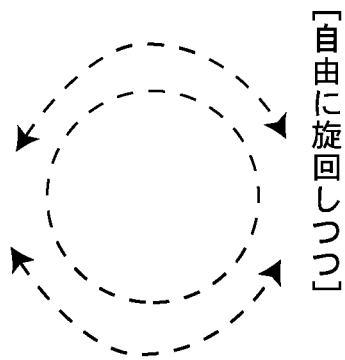
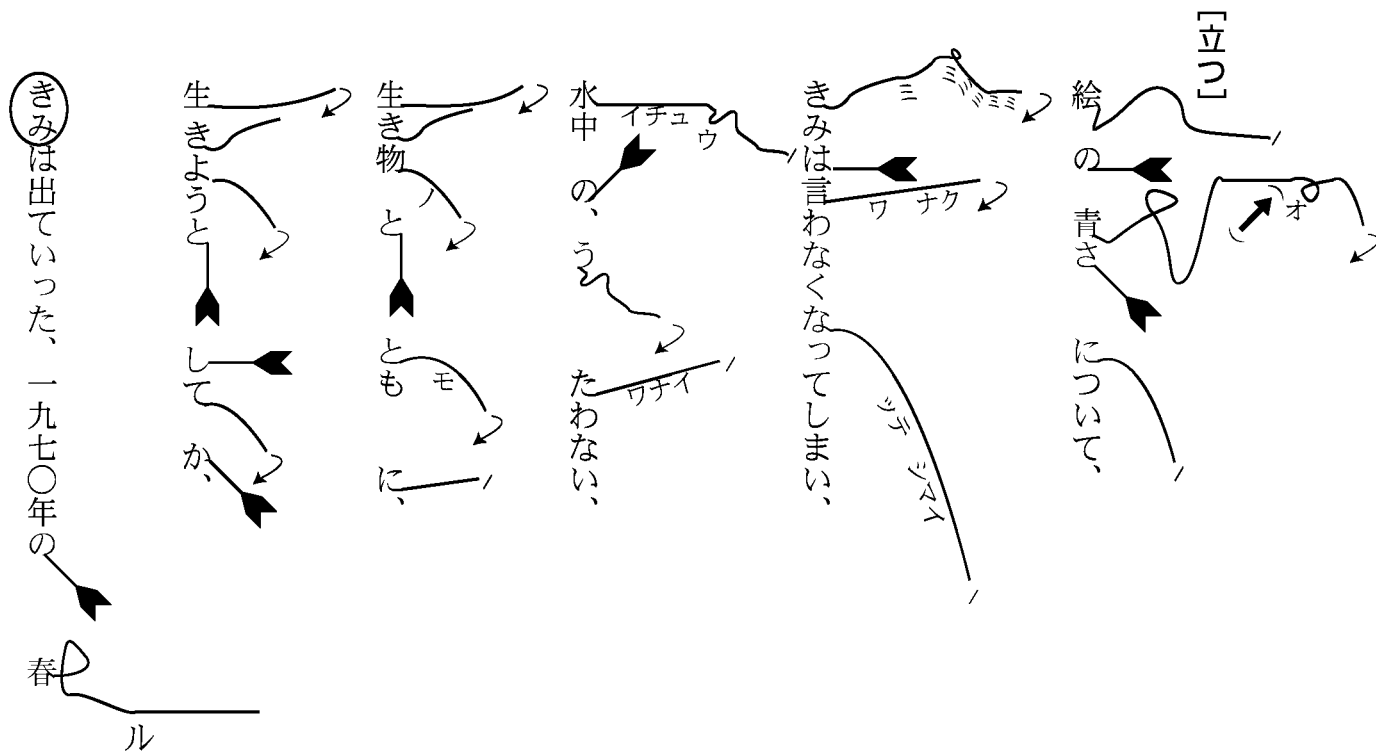
きみの目にふれるかもしれない廊

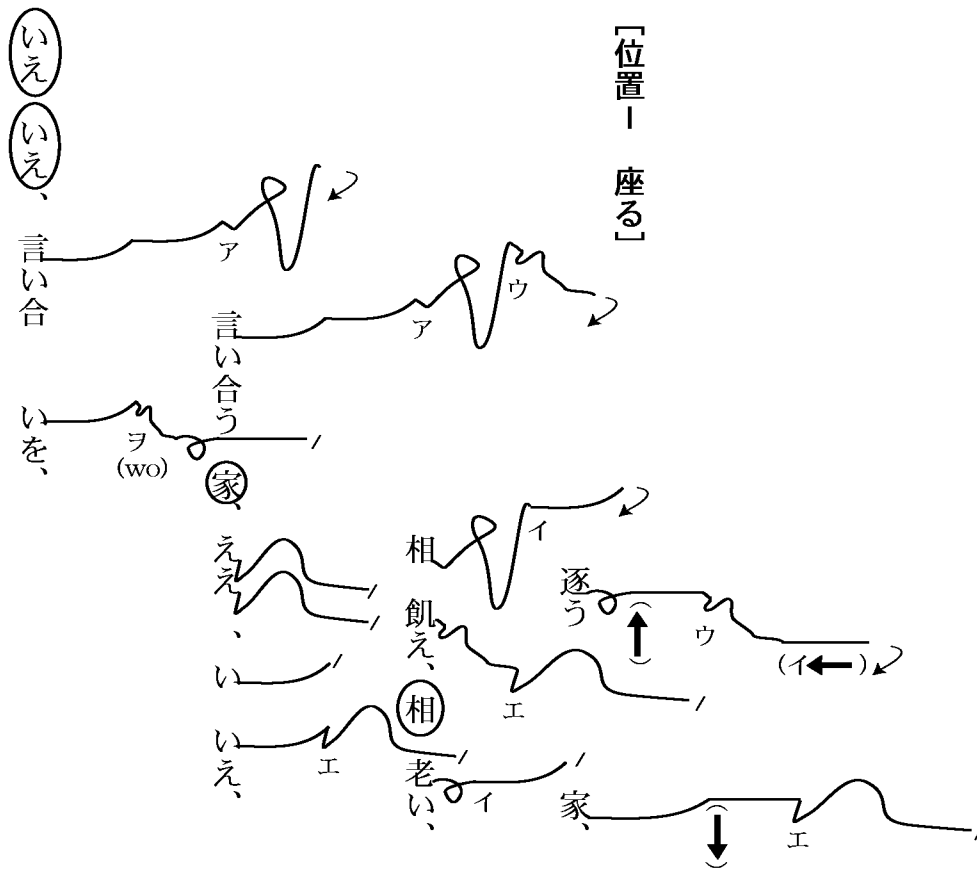
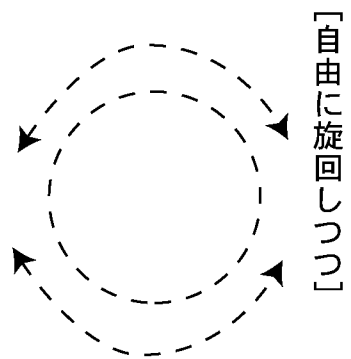
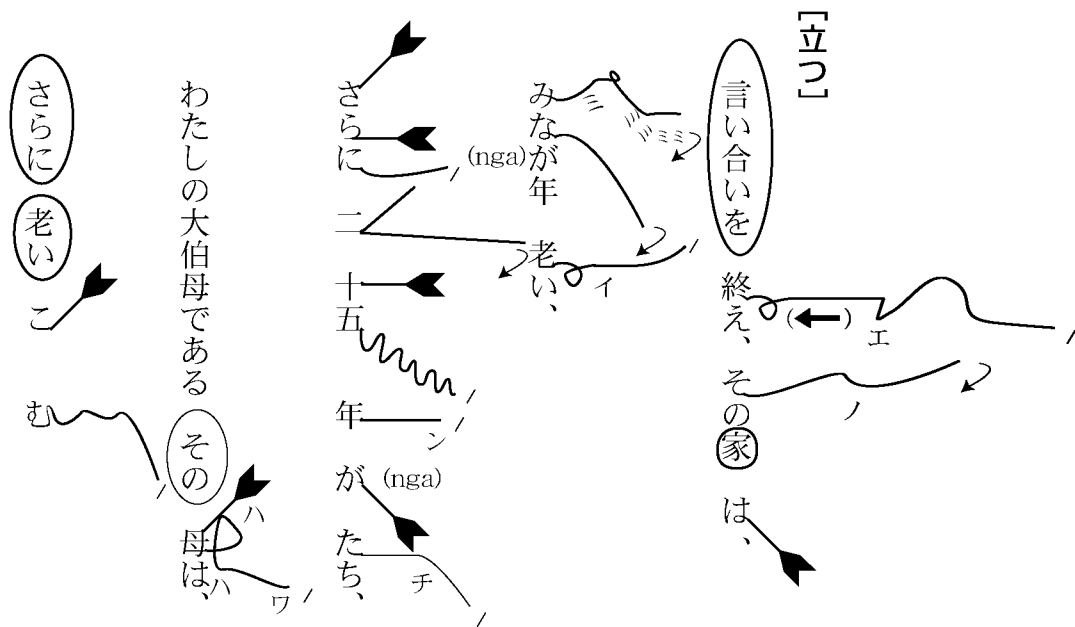
「そう考えると、二十五年、」
「母はさがしつづけたすえに、」

「自由に旋回しつ」

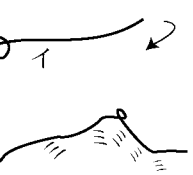


- 思い立つ、
- 駅
- 青い絵
- を
- はり出す、
- きみは
- その
- 絵を
- みつげられるか

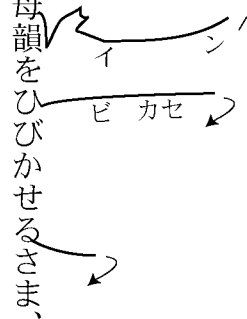
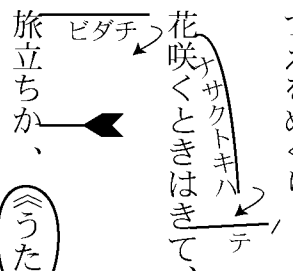




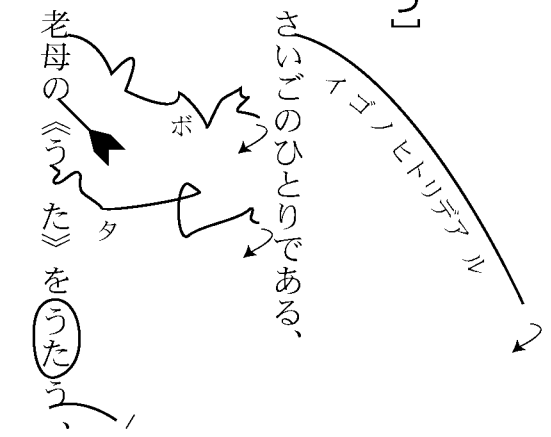
わたしの甥であるきみのゆくえ



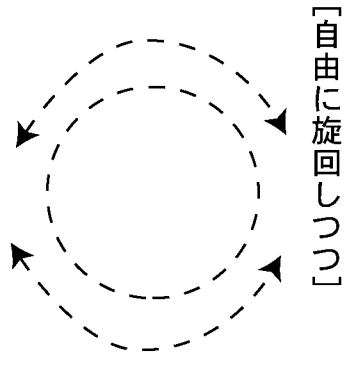
つえをめぐり、
花咲くときはきて、
旅立ちか、
《うた》はすべて母韻をひびかせるさま、



老母の《うた》をうたう、
さこのひりである、

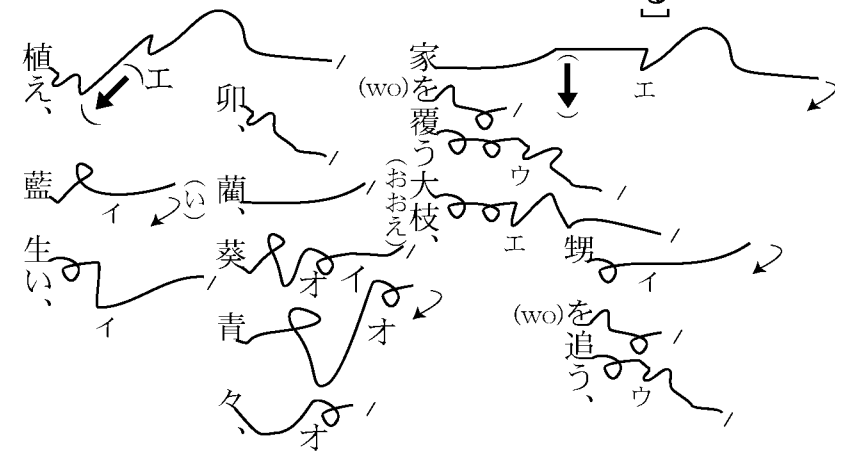


「立つ」



「自由に旋回しつゝ」

「位置〇座る」

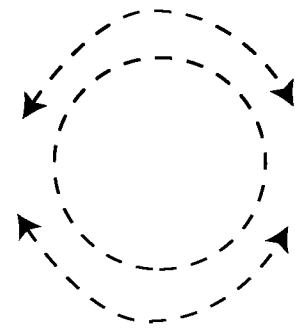


母韻だけになってしまった母
 (ひび) 韻きは、歲月をこえて、
 きみにつたわるか、
 ハ

お、う、あ
 呼びかけの言葉のみになってしまう老母の
 残留することも、
 呼びあっているのは聞こえるか、

【立つ】
 だんだん元気になる老母がひとりと、
 ボ

【位置E 座る】
 緒、(えい) 櫻、
 (おう) 襖、
 (wo)を、ウ、
 被い、イ、
 負え、エ、
 奥羽、ウ、



【自由に旋回しつ】

【立ち】

【位置】 座る

ああ
ああ、

老人の背につばさがひらくと思う、

セ
ニ
ジンノ
バサ
ガ
ラ
ク
イ
ン
ボ

母韻のみになっている老母の発音の練習は、

子音をうしなう

ことの悲しみを、

くりかえして、

十五
年のうちに、

なお思う、この《うた》は近くで聞こえず、

遠くにとどく大声として、

聞
こ
え
て
い
る
か

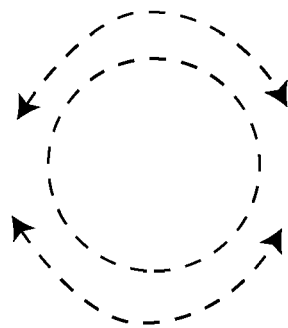
胃
硫黄、
オ

言おう、
オ
ウ

鋭
意追おう、
ウ

おい
おい癒え、
イ
エ

【自由に旋回しつ】



ゆび のむこうに、まっさおな、空間のひろがり

筆談（とは言わないな、ゆびで話）をする、
 海のいろは青、
 うみ
 み
 の
 い
 ろ
 は
 あ
 お

胸の飾りの文字をゆびさして、

「立つ」
 コ エル
 聞こえる、きみの鴉
 の
 羽根ぶとんにしみいる
 二
 十五
 年の
 のち、

「位置」 座る

「自由に旋回しつづ」

会おう、愛を負い、
 オ
 イ
 (wo)を
 言え、
 エ
 鴉
 (wo)を
 覆おう、
 (うい)羽衣
 (wo)を
 遭う鴉、
 ウ
 飢え、
 エ

